

水田フル活用に向けたかぼちゃの省力栽培試験

奥能登農林総合事務所

県では、近年の米価下落を受け、水稻農家の所得確保に向けて、園芸品目の導入による水田のフル活用を推進しており、当事務所では、奥能登地域の特産野菜の1つで、市場からの評価も高いかぼちゃを推進品目の1つとして選定しました。

水稻農家にかぼちゃの作付を推進するにあたっては、水稻の育苗や田植え作業とかぼちゃの管理作業との労力の競合がネックとなることから、かぼちゃの管理作業の省力化技術について、以下の実証試験を実施しました。

<実証技術の紹介①>不織布トンネルの使用

通常、植えた後の苗を保護するため、透明のポリフィルムでトンネル状に覆い、気温上昇に応じて換気のための穴を開けていきますが、通気性の良い不織布を使用することで穴あけ作業が不要になります。

<実証技術の紹介②>直播き+親づる1本整枝

直播きは、ほ場に直接種子を植えることで、育苗に要する資材費や労力を大幅に削減する技術です。また、従来1株から子づるを3~4本出しますが、親づるをそのまま生長させること(親づる1本整枝)で、つるの管理作業を減らすことができます。

これらの技術を組み合わせて実証した結果、収量については慣行より6割以上増加し、労働時間は3割削減することができ、労力の限られた奥能登地域において有望な技術であることが確認できました。

一方で、品質については、市場に好まれない大きすぎる果実や形の悪い果実が多くなってしまったため、株間を縮めるなど、果実サイズや品質の改善に向けて、引き続き試験を行っているところです。

事務所としては、今後も水田における園芸品目の導入を進めるため、作業の省力化と収量・品質の高位安定化を両立させられるような技術の確立を目指すとともに、開発した技術の経営評価を踏まえて水稻大規模法人等へ作付けを推進し、水稻農家の所得向上を図っていきたいと考えています。



不織布トンネル



1本整枝のかぼちゃの様子

問い合わせ先：農業振興部（0768-26-2323）